

宇野隆夫著

『莊園の考古学』

(シリーズ日本史のなかの考古学)

服部 英雄

莊園が考古学の対象になる。莊園は土地制度であるが、また村落・耕地・山野を含む生活の場でもある。従来莊園は主として文献史学の側から研究されてきた。しかし近年では地理、民俗もあわせた総合調査による莊園の解明が主張されてきている。本書はまさしくそうした新しい潮流の中で生まれたもので、考古学の側から莊園に住む民衆・支配者層たちの像をあきらかにする試みである。まさしく待望の書といえる。本書が検討する莊園(莊所)は木簡、墨書土器によって、その性格が明らかにになったものが多い。さまざまな期待ができるところである。書評子は文献に足場を置きつつも、現地調査・莊園調査を行ってきた。発掘現場をみる機会も少なくはなかった。そうした立場から論評を加えてみたい。考古学は、はたしてどこまで莊園を解明してきたのだろうか。目次を示そう。

はじめに

I 章 莊園入門

II 章 古代莊園遺跡の諸相

- 1 莊所と各種経営拠点の型
- 2 生産と流通

3 宗教

4 古代莊園の景観と営み

III 章

中世莊園遺跡の諸相

1 莊所と各種経営拠点の型

2 生産と流通

3 宗教

4 中世莊園の景観と営み

終章

莊園遺跡にみる古代・中世の考古社会史

II 章での古代、III 章での中世をそれぞれの項目で対比させる整然とした構成になっていることがわかる。

さて最初に「入門」がある。じつは書評子は書評に先立ち、考古学を専攻する大学院生たちと、合評会の場を持った。「入門」が設けられているように、本書が想定した読者はまさしくこうした若い研究者たちであろう。しかし「入門」者となった院生たちの報告は本書のセンテンスを適宜抜き書きし、それをつないだもので、かたちになってはいても、十分内容が消化されたとはいえないものだった。院生の力量のせいもあるが、正直なところ書評子も最初に読んだときはそれに近い状態に陥った。しかしそれではこの労作に対し、書評の任がはたせない。そこでつぎの二点を「切り口」として用意しつつ、再度読み返してみることにした。「切り口・その一」は建物の寿命である。

1 建物の存続期間と遺構の關係

莊園遺跡の建物は掘立て柱建物か、ないしは堅穴住居である。前者での柱は一本でも立つ簡単な建築工法である。しかし耐用年数は短い。たとえば二、三〇年前まで電信柱は木柱で掘立て柱だったが、いったいどれくらいもったのか。電力会社に問い合わせたところ、法定耐用年数は一五年とのことだった。一五年で減価償却するものとして原価計算をするという意味であろう。もともと土地の条件、木質によつてまちまちだったらしい。いまは木柱電柱はないからはっきりしたことはわからないが、規則では毎年点検をし、特に五年に一度は根本（ねもと）検査をした。そこで不良があれば取り替えた。新品でも五年目から検査をしたということだ。考えてみれば我が家にあった物干し竿の柱も、トタン堀の柱も、みなこの掘立て柱だったけれど、一〇年はおろか四、五年でグラグラになった記憶しかない。腐るし、猛烈にアリに食われた柱もあった。土の中にある掘立て柱であるかぎり、寿命は一五年程度である。むろん用意された木材の樹種・年輪などによつても相当に異なりはするだろう。電信柱は杉材だが、万一倒壊すれば甚大な被害をもたらす。管理はもともと厳正であつた。掘立て柱建物であれば、多少の腐朽はあつてもつかい棒などで延命措置がとられただろうから、若干寿命は長かつた。伊勢神宮の二〇年毎の式年遷宮が有名であるが、材は檜である。よほどに太い材で、質も吟味し、根本を焼くなどの防腐措置を行つて、それでも二〇年程度が限界だった。

十数年を経ての再建に当たり、同じような建物と同じ場所に建て、それがくり返されたのなら、その遺跡には無数の柱穴が残るはずだが、案外にそうした遺跡は少ない。遺構が単純なものは

臨時性の強い建物であろう。巻頭グラビアの金沢市上荒屋遺跡の遺構（SB110）は、ほとんど一回分の柱痕跡しかない。いかにもシンプルで可視的で、訴える力が強いのだが、逆にいえばその土地が建物敷地として利用されることがほとんどなかつたことを意味してもいい。この地の莊園時代をかりに七五〇年から一六〇〇年として、この土地が建物敷地として利用されたのは一〇年あまりにすぎず、あとの八四〇年は畑か広場か原野か、とにかく空閑地だった。細い柱穴も検出されているから文字通りの掘つ立て小屋が一、二回建てられてはいるが、それでも八〇〇年以上は建物はなかつたのである。そうした土地利用密度の希薄な場所が莊園の中心・莊所になると解釈することは、文献史学や歴史地理学の感覚からはなじみの薄いものであるが、近傍より莊所を示すと考えられる墨書土器が多数出土している。莊所建物は莊官の任一度に限られたもので、一〇一二年ごとに新任莊官の赴任時に、場所も建物も更新された。莊所は転々とし、莊官が赴任するたびに広大な莊園内の適地に移転した。莊官一代の勤務期間が一〇一二年だったとすると、短いともいえるが、逆に長いともいえる。熟年代三〇歳から五〇歳まで一つの家屋（主屋）に住んで、執事し支配できるのである。

文献史学では讓狀に「堀之内」とあれば、莊官・地頭は長くその拠点を継承（相伝）していたものと考えていた。考古学（本書）が示すものは、動きまわる莊所である。文献史学が考えてきた動かない莊所・政所とは、どちらが一般的な姿で、どちらが多数派だったのか。そしてそのことは時代によつて変遷したのか否か。これが「第一の切り口」である。つぎに「第二の切り口」は

建物の規模である。

2 遺構の建物規模——梁は二間

平安期・鎌倉初期の建物に関して「間面記法」という表記法がある。建物規模を三間四面、五間四面のように表記するが、間は桁行を表し、面は庇面の数を意味した。梁行は表記されなかったが、それは当時、梁は二間に定まっていたからである（足立康「中古に於ける建築平面の記法」『考古学雑誌』二三—八、昭和八）。例外的に寺院建築などに三間の梁も見られないわけではないが、一般家屋では複数の本数が必要とする梁は二間に決まっていた。

重い梁を頭上高く柱頂部まで人力で上げなければならないが、どのようにしたのか。一般民衆はあらかじめ小屋組を組んでおいて、そのまま数人がかりで頭上にあげて人力のみで柱に乗せたのではないかと考えられる。アイヌ住居の建築技法からの類推だが、「真如堂縁起絵巻」（『歴博』一一四）にみる陣の建築もかなり似ている。手の届くところまでだから、屋根の高さは低かった。しかし支配者層の家はそのような簡単なものではない。滑車や轆轤の利用は「法然上人絵伝」で鎌倉期には確認できる。だがこれは東大寺建立という特殊で巨大な建築現場でのことだから、どこまで一般化できるかは不明である。むしろその横に描かれた三角に組まれたミツマタが有効だっただろう。少しずつ順次高いミツマタに柱を移していけば、足場との併用で、人力での架上也可能だったとは思われる。

柱はあくまで土に掘込んだだけのものである。梁・桁をかけて、はじめて四本柱として安定した。構造的な安定を欠く建築途上の

二本柱に大きな荷重の梁を載せることは、危険きわまる作業だった。本書掲載の多くの遺構図を見ると当時の一間は八尺である。

二間（四・八メートル）を三間（七・二メートル）に伸ばしたならば建築の困難性、危険性は倍以上に増した。梁を継いだとしても同様であろう。発表以来八〇年を経過し、多くの歴史辞典に採用されている足立の古典学説は、古代の一般建物は梁行二間が限界であつて、あとは庇を継ぎ足す構造だったという説に読み替えることができる。『建築大辞典』（もや）の項にも「梁行二間を原則」とある。中世前期までの建築技術の水準を示すものとして、きわめて説得的であると書評子は考える。

そこで以上の二つの「切り口」を準備しつつ、本書の書評に取り組もう。まず荘所のあり方が検討されるが、そこでの重要フールドとなっているのが、前掲の上荒屋遺跡（金沢市）である。著者は古代荘園における荘所を1民衆の経営拠点型、2在地有力層主導型、3有力寺社主導型、4民衆の屋敷・在地有力層の居館型に分類するが、いずれにおいても上荒屋遺跡の各段階がモデル化されている。他の遺跡によるモデル化もなされているが、あくまで基本には上荒屋遺跡がある。よってこの上荒屋遺跡を書評の中心にした。

この遺跡での1は八世紀第3四半期（すなわち七五〇—七七四年）で、本書では「田宮」期とされる。2は八世紀末から九世紀はじめ（七九〇—八一〇年か）で、本書では「綾庄」期とされる。ところで1の時期の主屋がSB216で、本書によれば「3間×2間の側柱建物」（三八頁）である。側柱とは建物の外周に並ぶ柱（『建築大辞典』）のことだが、SB216は図を見る限りは本

柱（身舎）三間×二間のみで側柱はないし、かつ東側の三間は中間の二本の柱を欠くのである。図版がまちがっているのか、説明がまちがっているのか。書評子にはこの柱構造で上部に梁が架かるとは思われなかったのだが、建物としては不完全で、「主屋」とみるには説明不足である。著者はどのような建物構造、遺構の解釈を考えられるのであろうか。

つぎに「田宮」期、「綾庄」期という時期区分について。あざやかな見解とは思うのだが、根拠となる墨書土器の分布状況も、土器編年も説明されていない。分布については別の遺跡の状況、すなわち五四頁、五五頁の埼玉県上里町中堀遺跡あるいは長野県松本市下神遺跡の墨書土器分布図から類推するほかないが、一つの文字が書かれた土器は、特定の建物から集中して出土するわけではなく、遺跡全体からあまねく出土する。「田宮」がSB216から、「綾庄」がSB110（四一頁）の周囲のみから出土するというわけではないだろう。四三頁の第9図を見ると、「綾庄」という墨書は必ずしも卓越しているわけではなく、「三宅」、「宅」、「道」、「庄」、「館」、「東字」（四九頁図版から判断すると、字は庄の異体字か）などの数種の墨書のひとつのようだ。この時期区分の根拠については、やはり詳しい説明を要するのではないだろうか。

3の有力寺社指導型でもこの遺跡が登場する。ただしこのタイプは1型から3型までに分類されている。そして上荒屋遺跡は1型のモデルでもあり、2型のモデルでもある（四六、四八頁）。つまり一つの遺跡をもとにして二つのモデルが導き出されている。このあたりはやはり当惑するが、じつは2型の方は1型を含む総

合型である。1型は道守庄開田図に示されるようなタイプで、公的施設ではあるが家屋は密集しない。2型はその1型がいくつかわゆるかに集合したもので、別に倉庫院が形成され、仏寺も設置される。1型は2型の一部分ということになる。

2型モデル（統合タイプ）では上荒屋遺跡を「東庄」庄家とする。位置は1田宮、2綾庄と同じ坪のなか、つまりほぼ同一地点であるが、施設は前段階のものを引き継ぐことはなく、東に移動したとする。時期は横江庄が施入された弘仁九年（八一八）以後とされているから、2綾庄時期（七九〇―八一〇年か）の直後である。「東庄」は横江庄の一部とされているわけだ。「東庄」の位置づけの根拠と命名は出土した多数の墨書銘によっている。いっぽう墓谷川を挟み、さらに西方の蟹川に近い地区（こんにちでは松任市域）が、もう一つの庄家とされ、「西庄」とされている。しかしここから出土した墨書には「西庄」なる文字はなく、「本」「卅」などである。上荒屋遺跡からは大量の東庄文字のほか、西庄、北庄、南庄、東中庄の文字も出土している。著者は北庄、南庄、東中庄は調査範囲外とした。してみれば西庄についても調査区外の可能性もあるはずだ。著者がこの遺跡を「西庄」に比定された根拠は、方位関係以外には考えられないが、墓谷川で隔てられ、近代に至るまで行政界を異にした両遺跡ははたしてこの時期、一体のもの（「横江庄」）だったのだろうか。著者が「西庄」とされた「庄」銘墨書土器の出土を欠く遺跡こそが「横江庄」という荘園で、「東庄」「西庄」はともに「横江庄」とは別の地域に存在した別荘園だった可能性はないのだろうか。

「西庄」荘所とは別に一区画を倉庫院とみなす案が提唱される。

炭化米の出土をみるからここに倉庫があったことは確かだ。しかし倉庫は庄家と独立して存在するのだろうか。倉にはそれぞれ不寝番が必要だったし、武力がなければ倉庫院は守れない。倉庫のある区域の北西には、多数の墨書土器を出土する総柱建物を持つ居住区域が検出されている。書評子はこれらをあわせ、倉庫院こそ新しい庄家（政所）とみることで考えた。

すなわち著者は在地有力層主導型モデルを提示した（四二頁）。その構成は主屋、付属棟、広場、船着き場である。つづく有力寺社主導1型モデルも、その構成は主屋、付属棟、広場、船着き場であって、全く同じであり、堅穴工房が増えた点だけがちがう。さらにこの1型モデルが複数集まって、同2型モデルとなる。倉庫院は新設されるが、中核となる荘所は1型モデルに同じというのであるのなら、有力寺社主導の段階になっても、在地構造自体は在地有力層主導型の段階と本質的には何ら、ちがわなかったことになる。このことには書評子としても大いに首肯できる部分がある。東大寺領荘園の成立といっても、在地の実態はさほどに変わらなかった。

しかし中心になる荘所の位置、構造までが同じだったとはいえない。東大寺の資本を導入した新展開に対応する形態の変化はあったのであり、まさしくそれは河川に面した倉庫院型荘所の出現に現れている。そう考えるべきではないだろうか。そしてこの段階で、かつての荘所は「領主私宅」になって、領主は倉庫院たる新「荘所」に通動したのではないだろうか。書評子は著者のモデルをそのように読み替えてみたい。

1、2、3 相互の時期と継続関係について。著者は1（七五〇

一七七四年）が「短期で廃絶」（三九頁）、「廃絶して後に再開発」（四〇頁）されて、2 綾庄（七九〇―八一〇年）になったと強調する。さらにこの2 綾庄は3 東庄（八一一年―）には「引き継がれなかった」ともいう（四八頁）。それぞれの段階ごとの廃絶が強調されている。だが述べたように掘立て柱建物はもともと十数年で「廃絶」する。1 の段階の遺跡一带には、本書に言及のないSB120、50、60などの大型建物がまだいくつもある。こうした建物を經由して機能は継続し、更新されたのではなからうか。まして時間差のほとんどない2―3 の移行期には、人的にも機能的にも荘所（東庄）は継承されたとみたい。この遺跡は運河・河川に面した立地に特色があることは、著者が強調するところである。十年を経て新任荘官が着任し、隣地に新築がなされる。旧屋はつかい棒をあてがわれて、倒れるまでは物置として使われた。伊勢遷宮でも隣地に新社殿が再建される。建物機能を中断させないためであろう。そんな風にして更新がくり返される。隣地への移動こそあったものの、運河、河川に面した荘所・倉庫として経営が維持され続けた。その間、「廃絶」することはなかったと考える。

著者は別箇所で、「短期型の屋敷」「代々、短期型の小規模屋敷を営んできた」と表現する（六七頁）。掘立て柱建物は近接地で再建されるか、または一代で廃絶されるか、二つに一つしかない。前者は長期・連続型で、後者だけが短期になると書評子は考える。著者のいう「短期」とは一体どれぐらいの期間をいうのだろうか。また掘立て柱建物における「長期」とはどのようなものをイメージされるのか。「代々・短期型」というが、ふつう「代々」なら

ば長期であろう。「代々」かつ「短期」では形容矛盾である。書評子のいう前者（「長期」）の意味にちがいないが、ターム・記述は極力、誤解のないことば・文章を使用すべきではなからうか。

著者はつづく民衆の屋敷・在地有力層の居館型の段階になって、火災などによって中央の力が衰退するなかで、在来勢力が力を蓄えて、大型建物が同じ場所建て替えられるようになるとする（五七―六〇頁）。興味深い記述なのだが、残念ながら具体的な「建て替」に関する記述を欠くため、当否に言及できない。

このあたりでは、たとえば中堀遺跡を説明するのに、本文中に主屋のSB表示がなかったり（五三頁、本文に「東の3町強」とあって、そのあとに「主屋」がつづくため、主屋とはSB1ではなく、SB42のことかと当初は考えた）、本文中のSB番号が図中になかったりして（五七頁、SB35とはSB45の誤りか）、ちぐはぐで、とても読みづらかったことを告白する。また屋敷を荘所として寄進地系荘園を主張したともあるが（六〇頁）、二百丁にも近い規模の荘園成立を一丁程度の屋敷保有で説く説明は苦しい。

「切り口」の第二として用意した建物規模に関していえば、六七頁で東京都日野市落川遺跡を素材に五間×四間あるいは七間×四間の大型建物の存在を指摘する。ここでもSBの番号表示がないため、図上のどの建物を指しているのか判然としないが、中央のSB133などは身舎三間×二間に三方庇がついただけの建物なのに、わざわざ柱穴の存在しない外構線を建物の一部として五間×五間の建物にしている。あきらかに拾いすぎである。あとの方になるが一二頁・埼玉県本庄市大久保山遺跡での掘立5とい

う建物は身舎五間×五間に四面庇の建物となっているが、これは実際には西側の一部しか検出していない。東側（五間×五間の大半）は未発掘地区で、一つの柱穴も検出していない。にもかかわらずこのような巨大な建物が復元されることは何とも不思議である。すぐ南の掘立81は八間の庇列を持つが、身舎は七間×二間である。他も同様で、この遺跡では二間梁行の建物ばかりで、間面記法の考え方どうりなのに、未発掘地区を含む推定復原では大型建物になってしまっている。考古学が建物を大型化させる傾向にあることはまちがいないとみた。著者は先行する著書（『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』）では、二間梁行の建物が一般的であるとする岸本雅敏氏の見解を引用していたような記憶があるのだが。

概して本書では建築技法一般についての説明が少なすぎる。いわゆる総柱建物を著者は床張り建物とみる（五一、五九頁）。倉庫も床張り建物も、遺構としては同じ総柱になるが、どうやってそれを区別していくのだろうか。またなぜ床張りに総柱が必要なのか。梁を架土するのに使われた足場や、補強用の柱などは考古学的な痕跡を残すことはなかったのか。そんなことも初学者にはわからないのである。

II章2は生産と流通である。上荒屋遺跡から出土した木簡によって、多くの稲の品種がわかる。紙に残された文献史料のみではわからない細部にいたる記述である。七〇頁図には「品治部君足墨五斗二升」と読まれているが（ほか一点も「墨五斗二升」の部分は同じ）、図を見ると「墨」ではなく「黒」ではないかと思う。『田植草紙』などに「めくろのいね」「ふしぐろの稲」という品

種がみえる。そのなかまでであろう。量は「五斗二升」「一石二斗」など。

広島県には「何斗蒔」という地名が多かった。書評子の聞き取り調査では一斗蒔は八畝だった。太閤検地前の度量衡に換算して七畝弱（六・六畝）。中世の肥後国阿蘇湯浦郷でも一反は一、五斗蒔から二斗蒔だった（阿蘇神社文書）。「粃・一石二斗」はおよそ八反に対応するもので、莫大な播種量である。田植草紙は「三合まいては三石」と一〇〇〇倍に増えるといった。発芽効率、粃と玄米の差、直播と田植の差等を考慮して、私案によると、この木簡の付いた俵ないし麻袋は一年後に少なくとも四十石、現在の価値にして六〇〇万円の価値を生んだ。木簡は単なる付札とはいえ、それ自体もさほど粗末にはされなかっただろう。

さて倉庫院では焼失し、炭化した籾稲（穂付き）が出土している。いっぽう著者はこの籾稲木簡が「東庄」地点で出土したことを受けて、倉庫院にて籾稲として保存されていたものが、運搬され、「莊所」（私見では領主私宅）で配布されたとしている。籾が発掘された倉庫院からのものかどうかはしばらく措くとしても、どこかの倉庫から運ばれたことは確かである。そこで籾稲は「粃」にされた。粃にして出挙する行為は倉庫そのものではなく、広場に運ばれて行われたらしい。ただし著者は「種粃を農民に分与し、種粃札を廃棄した」とする。莊所は出挙時に一括してそれを廃棄したということになる。しかし不必要になって廃棄するのなら、個々の農民が俵・麻袋のまま苗代に運び、そこで廃棄したと考えるのが自然である。しかしそれでは遺物は拡散され、莊所での出土につながらない。

配布を受けた農民は多く文盲である。配布する粃も「黒」のほか「大根子」「富子」「蓮花」などさまざまな品種があった。品種がちがえば、播種・収穫時期もちがってこよう。品種管理は目視だけで十分可能だったのだろうか。穂付きの保存でそれが可能だったという見解のあることは承知しているが、書評子は目視は不可能だったと考えている。同じ水田内に実る、同一の種からの稲のさまざまな個性を観察し、早生のもののみ、あるいは病害虫に強いもののみを選択して種粃として保存し、品種改良するわけだから、外見上はさしたるちがいはなかっただろう。品種の管理は莊所の台帳に記録されていたが、いちいち照合する必要があるように、備忘のため農民にも収納時までの木簡保管を義務づけたのではない。品種の適正管理を考えると、収納時の計量の際にこそ、前年分の木簡はこの広場で廃棄されたのではない。そしてその行為は「収納が倉庫（書評子のいう莊所）ではなく、書評子のいう「領主私宅」（著者のいう「莊所」）で行われたことにこそ意義がある。出挙も収納も在地の領主・支配者が担う根本的な統治・支配行為だった。かくして出挙木簡は領主私宅で廃棄されて、一括出土することになったと考えた。試案である。

さてこの後、古代莊園に関して手工業、漁業、交易、宗教、景観が論じられるが、紙数の都合上、検討は割愛させてもらう。

つづいてⅢ章は中世莊園が扱われる。ここでも莊所1型、2型、方形居館1型、2型、3型がモデル化される。また商工業の観点でも定期市・葬地型、定期市・港町1型、常設市港町1型、定期市・港町2型などのモデルも設定される。しかし本書全体の印象でもあるが、こうしたモデルタイプを設定することによる有効性、

平面配置の特色、それぞれの歴史的発展性の説明などが、いまひとつわからなかった。主として権力編成とのからみで説明がなされているようである。たとえば一四二頁に港町1型は寺院が主導し、2型は寺院と武家居館が拮抗し、3型は武家居館が主導、あるいは一五五頁で方形居館2、3型の増加は武家政権の影響の強まりを示す、とあるが、そうしたことから、遺構配置の特色との関連づけが稀薄に思われた。説明に割かれる部分が少なすぎよう。

さて中世荘園では建物が巨大化する。主屋として六間×五間(四面庇)(加賀市三木だいもん遺跡、右庄)、六間×五間・南庇(大内城)、七間×四間・西庇(宮久保遺跡、渋谷庄)、五間×四間、庇は持たない(小矢部市北反畝遺跡)などが紹介される。しかし一二世紀であれば、禪宗様(唐様)、大仏様(天竺様)の普及以前で、貫のような革新的技術の導入以前である。農村での建築技術は前時代と大差はあるまい。述べてきた考え方に従えば、これらは四間×二間・四面庇に一面孫庇、四間×二間・四面庇に南一部に孫庇、三間×二間・四面庇、一面に孫庇、三間×二間に四面庇である。そうみた方が建物としては自然であろう。間面記法ならそれぞれ四間四面、四間四面、三間四面、三間四面である。とくに宮久保遺跡の場合、図からは読むかぎりでは報告書自身もSB24を一株ではなく、二株とみているのではない。

なお草戸千軒遺跡における葬地の説明がある。犬が囓った痕跡のある遊離した成人人骨が、寺院的な空間にある池の最下層から出土したことに関して、著者は骨を集めて池に供養したというのだが、そのような供養法はあるのだろうか。もしそうだとすると庭の池とは住僧にはいかなる存在であったのか。また一四三頁に

は寺院的な空間に付属する屋敷とともに、骨細工の出土が記されている。骨細工とは何で、さきの人骨とどう関連するのだろうか。本文に説明がないのはどうしてだろうか。ほかここでも一四〇頁・池SG3495が図中の番号に見えない。本文と、図が一体となった説明になっていない箇所がかなり目に付いたが、編集者の目配りも不足しているのではないだろうか。残念ながら本書の瑕瑾といわざるをえない。

さてすでに所与の紙数も尽きかけた。本書にとりあげられた荘園遺跡は墨書土器や木簡を出土するなど文字史料にも恵まれ、イメージがゆたかで、それまでの荘園像を再検討する素材を提供してくれる。本書の功績の第一はそこにあるだろう。後学もこれにならって、多くの報告書を手に取り、検討作業を進めなければならないと実感する。本書はいくつものモデルを提案している。モデルの有効性、またモデル化の適切さなどについては、いくぶん異なる案も可能かもしれない。しかし本書のように大胆に勇敢に、遺跡から歴史像を構築していくことを、まず第一に学ばねばならない。そのことが読後の印象に強く残った。

なお本書は入門の章を用意しているように、読者層として初学者を対象としたはずだが、本文自体は初学者には難解なものがあった。書評子が疑問としたようなことは、考古学界では自明・既定のこととも含まれていようが、やはり基本的なことがらは入門の項であってほしかった。たとえば遺構と建物の関係、建物の規模高さ、建て方の技法、使用できた道具など。あるいは論理上柱がなければならぬところに柱が検出されない場合の判断基準など、柱跡から上部の建築構造を推定する場合のルールを説明してほし

かった。また限られた発掘調査区内の成果から、遺構の消長、発展を論ずる場合の留意点、どのように発掘調査区域外の遺構を推定していくのか、などにも言及がほしかった。そうしたことをまづ入門に書いてもらわなければ、部外者が莊園考古学の門をくぐることは、著しくむずかしくなるのではないか。そんな読後感が残った。

以上基本的知識を欠くままに、疑問に思った点を羅列してしまった。しかし本書のような試み、挑戦が大いに必要とされている

ことは十分理解したつもりである。書評子には書評に従事した心地よい満足感が残った。本書にならって考古学と文献史学、建築史学、民俗学などの隣接諸学が今後積極的に対話を進めていけば、あたらしい莊園像が創出されることであろう。あらためて本書刊行の意義の深さを実感する。

(A5判 二二頁 二〇〇一年六月 青木書店 三〇〇〇円+税)

(九州大学大学院教授